

## 平成29年12月NHK中央放送番組審議会

12月のNHK中央放送番組審議会は、18日(月)、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成30年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、ぼくらはマンガで強くなった「復活」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	大日向雅美 (恵泉女学園大学学長)
副委員長	渡部 潤一 (国立天文台副台長)
委員	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	今井 忠 (NPO法人東京都自閉症協会理事長)
	大川 順子 (日本航空(株)代表取締役専務執行役員)
	鎌田 實 (諏訪中央病院名誉院長)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	立野 純二 (朝日新聞社論説主幹代理)
	田中 隆之 (読売新聞東京本社執行役員論説委員長)
	出口 治明 (ライフネット生命保険(株)創業者)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren. Nagata 主宰)
	仲道 郁代 (ピアニスト)
	西原浩一郎 (金属労協顧問)
	藤村 厚夫 (スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当)

### (主な発言)

<平成30年度国内放送番組編集の基本計画(案)について ~諮問~>

- 「これまでの質的、量的評価の手法に加えて、個々の放送・サービスの『役割』や『到達度』などの視点を取り入れ、適切な評価・管理体制を構築していきます。」とあるが、具体的な評価イメージはあるのか。

(NHK側)

これまでの質的指標、量的指標以外に、それぞれの放送が持つ「視聴率にとらわれない役割」やどれだけ知られているかという「到達度」といった要素を盛り込み、評価指標を自分たちで作りたいと考えている。非常に難しい課題だが、既に検討を始めており、どのような指標が適しているか、番組をいくつかピックアップして開発していく予定だ。

- 「放送の自主自律、不偏不党を貫き」とあるが、外部からの干渉を受けないのは当然の話だ。重要なのは編集権がどこにあるかであり、責任を持てる場所を持つべきだと考える。責任を持つ人間がNHKの中立性を堅持できるようお願いしたい。
- 各委員の意見を反映し、今回の原案はできている。原案に沿って番組編成が行われるという前提で今回の原案を可とし、答申したいと思う。異議はないか。
- 異議なし。
- 原案を可とし、答申することにする。

(NHK側)

答申いただきありがたく思う。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、1月の経営委員会に「平成30年度国内放送番組編集の基本計画(案)」を提出し、議決を得たい。来年度の具体的な番組編成を記した「編成計画」については、2月に予定している審議会で報告させていただく。

<ぼくらはマンガで強くなった「復活」(BS1 11月10日(金)放送)

について>

- ナビゲーターの高橋大輔さんが初回でいきなり自身のエピソードを紹介したことに違和感があった。全6回の放送を予定しているのであれば、このエピソードは最初ではなく最後に放送した方がよかったのではないか。「復活」というテーマに当てはまる選手は他にも多くいる。最初は他のアスリートについて客観的に伝える立場に徹した方がよかったと思う。今はスポーツマンガが数多くあり、影響を受け

た部分が技術的なものであったり精神的なものであったり、人によってさまざまであることがよくわかり番組自体はおもしろかった。だが、だからこそもっとマンガのストーリーについて時間を割いてしっかりと伝えた方がよかったと思う。アスリートがマンガのどの部分をどのように感じたのかをもっと知りたいと思った。

(NHK側)

ナビゲーターについては、まず先に高橋さんのエピソードを取材しており、その際にご本人が関心を持っていることがわかったため、打診してみたところ実現した。高橋さんが出演することで、より広い視聴者層に関心を持ってもらえるという期待もあった。マンガの紹介かアスリートの話かということについては、以前特集番組として放送した際に、作品の紹介に重点を置いたこともあった。今回はアスリート寄りに紹介してみたのだが、マンガの説明がやや足りない部分もあったかと思う。各回の制作の中でよりよい伝え方を検討していきたい。

- マンガが文学や音楽などの芸術と同じように、一人の人間に大きな影響を与えることが改めて実感できた。スポーツをテーマに伝えていることが新鮮で、マンガとアスリートの関係を相互の観点から紹介していたことが非常によかったと思う。元車いすバスケットボール選手の京谷和幸さんのエピソードは、まさに番組タイトルどおりの内容で、「スラムダンク」という作品に本当に大きな影響を受けていることが伝わってきて感動した。一方で高橋さんのエピソードは、彼がマンガで強くなったのではなく、むしろ漫画家の槇村さとるさんがアスリートに刺激を受けたような内容で、この番組の中で紹介されることにやや違和感があった。高橋選手復活の部分はよくできていたので、別の番組として伝えた方がよかったのではないか。槇村さんの作品「モーメント 永遠の一瞬」は女子フィギュアスケートのマンガなので、女子選手のエピソードがあればその話を伝え、高橋さんがナビゲートする、という形が番組として適していたと思う。番組の趣旨と内容のズレはやや残念だったが、内容はおもしろかった。
- 高橋さんのエピソードは、番組タイトルや趣旨に合っていなかったと思う。そのエピソードがレギュラー放送の第1回に放送されるのは、彼がテレビで初司会をするという話題性が影響しているという印象を強く受けた。その気持ちはわからなくはないが、初回には京谷さんのエピソードのように、マンガとアスリートが深くかわりあった話を持ってきてほしかった。日本のマンガは海外では非常に高く評価

されているが、国内ではいまだに文化的に低いものとして扱われていると思う。その中で、マンガが人生にどのような影響を与えているかを取り上げ、マンガの価値を改めて見つめ直すという番組の着眼点はよいと思う。スポーツと密接に関わっている漫画家は数多くいると思うので、今後にとっても期待している。

- 個人的にはマンガにもスポーツにも関心は高くないのだが、とても楽しめる番組だった。「スラムダンク」は私たちの世代では男女問わず多くの人が読んでいて自分も知っていただけに、京谷さんのことばの一つ一つがよく理解できた。スポーツをしない人間にとってアスリートは超人のように見えてしまうものだが、番組では試合の映像だけではなく、車を自分で運転し自分で乗降するなど日常の姿を見せていたことも印象的だった。車いすバスケットボールのマンガ「リアル」が京谷さんをモチーフに描かれていることも含めて、多くの人に夢を与える内容でよかった。マンガのセリフに大きな影響を受けた経験がある人は多いと思う。そのようなセリフを紹介する短い番組が深夜にあってもよいのではないか。

(NHK側)

マンガのセリフに影響を受けている人は非常に多く、そうした本も出版されている。スポーツ選手以外でもマンガに影響されて社会で活躍している人は大勢いる。検討したい。

- 京谷さんのエピソードは心に迫るものがあり、マンガのストーリーやセリフの影響力を実感させられた。トップアスリートの想像を絶する困難、競技を超えた人生そのものの軌跡がマンガのストーリーと交差して、魅力的な番組に仕上がっていた。アスリート自身の魅力だけではなく、競技の奥深さ、マンガの力と作者の思いなど、スポーツとマンガそれぞれについてさまざまな要素を盛り込み、印象的に伝えていて幅広い世代に受け入れられる番組だと思った。ただ、京谷さんのエピソードでは、マンガ「リアル」執筆に至る漫画家の思いなど、マンガの側面から伝えるものがもっとあればよりよかったのではないか。また高橋さんのエピソードは、この回に盛り込むのではなく、別の番組で膨らませて伝えたほうがより魅力的になったと思う。日本のマンガ文化は海外で高く評価されている。東京オリンピック・パラリンピックを控える中、マンガとスポーツとが交差するエピソードを発信できれば、世界に日本がより魅力的に伝わるのではないか。国内放送だけではもったいない。海外でも十分受け入れられる番組だと思うので、そうした展開にも期待したい。
- 高橋さんと槇村さんの話は、高橋さんとマンガとの関係が深すぎないからこそ、槇村さんの作家としてのエピソードから作品の魅力がよく伝わってくるものに

なっていてよかった。マンガという静止画でありながらダイナミックな描写での見せ方も非常にうまいと思う。充実した作品論になっていた。

- スポーツとマンガというのは、非常にぜいたくでおもしろい切り口だと思った。それだけに、アスリートとマンガを結び付けたさまざまなことを見せられただけのような印象があり、それぞれのエピソードの着地点がややわかりにくかったと思う。個々のエピソードはさまざまな掘り下げ方ができると思うが、最終的には彼らの心が動いた何かがあるとより味わい深い番組になったのではないか。また、アスリートではない人がマンガにどう影響を受けたか、あるいは、アスリートがマンガではなく絵画などの芸術にどう影響を受けたか、といった番組があってもよいと思う。そうした広がり期待を感じた。
- とてもよい番組だった。京谷さんのエピソードは番組タイトルにぴったりで、二本立てにせず、このエピソードだけでも十分見応えのある番組になったのではないか。京谷さんが涙を流したシーンは印象的だった。車いすバスケットボールを始めてすぐに強くなったわけではなく、リハビリや練習をものすごく重ねたと思う。そうした部分も盛り込んでこのエピソードだけに絞って伝えれば、より印象深い番組になったように思えて少し残念だった。こうした番組はよいと思うのだが、その一方で、マンガや本、コーチなどとの出会いやきっかけがないとうまくいかないのではないかと思ってしまう人もいると思う。若い人と話していると、そうした出会いやきっかけに関心が高いと感じることも多い。しかし、人は地道に頑張っていればさまざまな展望が開けてくる。劇的な出会いやきっかけがなくても大丈夫、というメッセージも必要かと思った。
- 人物の描き方が非常によかった。数多くある過去の映像の中からエピソードに合ったものを盛り込んでいたことも功を奏していたと思う。非常によい番組だったが、一方で世の中には挫折を引きずっている人もいる。そういう人がこの番組を見てどう思うか、そのことも常に気に留めておく必要はあると思った。
- 京谷さんのエピソードは番組のテーマに合致していてとてもわかりやすかったのだが、高橋さんのエピソードは少しずれがあったように思う。高橋さんと榎村さんの会話で一致していたのは、極限まで集中力が高まった状態「ゾーン」についてだった。演技の最中に「ゾーン」に入って、肉体を極限まで酷使しているにもかかわらず、それを全く感じずに演技が驚くほどうまくいく状態を経験したのだという。この「ゾーン」の話は個人的には非常に興味深いものだったが、「復活」というテーマとは異なる話で違和感があった。違うテーマで取り上げたほうがよかった

と思う。

- マンガは誰もが親しめる身近なものでありながら、人生をも変えうる力があると改めて感じ、日本が世界に誇るすばらしい文化だと思った。そのことが京谷さんのことばからも実感できた。京谷さんのエピソードは、マンガに影響を受け、どんな思いで人生を切り開いていったかという内容が非常によく伝わってきたが、後半の高橋さんと槇村さんのエピソードは消化不良な印象を受けた。漫画家が作品を描く思いに迫ることで、日本のマンガ文化のレベルの高さを感じさせるような内容になっていれば、番組の趣旨に合ったものになっていたと思う。
- マンガとスポーツの組み合わせは挑戦的な取り組みだと思った。ただ、アスリートのようなドラマチックな人生を送る人はそうはいない。個人的には、むしろ漫画家がなぜあれほどまでに長い間創作活動を続けられるのか、挫折しない心に興味をひかれた。そうしたことに焦点を当てた番組があっても面白いと思った。

(NHK側)

ふだんBS1を見ない人に見てもらうことも番組の狙いの一つだ。この回は、普段BS1を見ない若い層の男女が見てくれたというデータが出ている。皆さんが違和感を指摘した番組後半のほうが見られたというデータも出ており、難しい部分もあるが、厳しい指摘も含めていただいたご意見を参考に、今後も多くの方に見ていただける番組を作っていきたい。

<放送番組一般について>

- 11月26日(日)のNHKスペシャル「あなたの家電が狙われている～インターネットの新たな脅威～」を見た。IoT機器が急速に普及し、暮らしがより便利で快適なものになる一方で、その裏に潜む人の安全やプライバシーにかかわるリスク、企業や国家といった社会システム全体への脅威の実態を、国内外の取材を通して浮き彫りにする衝撃的な内容だった。サイバーテロなどのもたらす脅威とその対策の重要性、緊急性が説得力を持って伝えられており、NHKの高い取材力が感じられて見応えがあった。番組でも言及していたように、東京オリンピック・パラリンピックに向けて警戒の必要性は高まると思う。継続的な報道をお願いしたい。
- NHKスペシャル「あなたの家電が狙われている」は、インターネット社会の新

たな脅威を警告した番組として評価したい。I o T機器の普及で生活が便利になる一方で、インターネットは闇の部分も大きい。私たちが日常的に使っているパスワードが、ハッカーたちにいとも簡単に解読されてしまうことには、驚きと危機感を感じた。そうしたリスクの部分が、海外の実態も交えて多角的に取材されて伝えられており、非常にわかりやすかった。ただ、今後ますますI o T機器が普及していく中で、消費者は一体どうすればよいのか、具体的なアドバイスがあればなおよかった。そうした視点も持ちながら、今後も報道を続けてもらいたい。

- 11月28日(火)のNHKスペシャル「スクープ 日米首脳会談の内幕—対北朝鮮戦略—」を見た。首脳会談について表に出ていない内容が伝えられ、スクープという名にふさわしい番組で、NHKの取材力の高さを感じた。ただ、日本とアメリカの北朝鮮問題への対応は必ずしも方向が定まっているわけではなく、幅がある。トランプ大統領のこれまでの側近の中には「北朝鮮は攻撃すべきではない」という人もおり、そうしたところ取り上げられていなかったことは気になった。番組の流れが一方向に偏ることのないよう、もっと幅広い発言を捉えながら伝えたほうがよかったのではないか。また、事前の番組告知が少なかったように思う。重要なテーマなので、きちんと告知してもらいたい。

(NHK側)

番組では、対話よりも圧力とする現在のアメリカの外交姿勢に批判的な、オバマ前大統領の側近の発言や、有事に至った際のリスクなども具体的に紹介した。視聴者の判断のよりどころとなる情報を多角的に伝えられたと思っているが、指摘は十分参考にし、今後の番組づくりに生かしたい。

- 12月3日(日)のNHKスペシャル「皇位継承へ 素顔の“新天皇”」は、両陛下のすばらしい人柄を改めて感じられる内容で非常によかった。現在の憲法の中で即位した初めての天皇として、日本の象徴であることを体現されてきた中で、多くのご苦勞もあったことと頭が下がる思いがした。再来年の退位の日までさまざまな手続きが進行していくことになると思うが、この期間は日本人が象徴天皇制について考えるのに非常によい機会だと思う。機会を捉えて象徴天皇制を取り上げた番組を期待したい。
- 12月10日(日)のNHKスペシャル「追跡 東大研究不正～ゆらぐ科学立国ニッポン～」は、東京大学で研究予算をめぐる競争が激化する中で研究不正が行われた背景が克明に伝えられていて非常によかった。「ネイチャー」など評価の高い

学術雑誌に論文が掲載されることがインパクトファクターとして高い点数が付けられ、研究資金獲得に大きく影響するため、掲載を目的に不正が起きる構造がよくわかった。科学や医療の分野でインパクトファクターを盲信することの危険性を警告する内容で非常によかった。

- このNHKスペシャルは非常によかった。これまで研究不正についての報道は、個人に責任を負わせることが多かった。しかし、本来は研究者がなぜ研究不正に走るのか、構造的な問題を解き明かすことが重要なのではないかと感じていた。その意味で今回の番組は、研究者の置かれた状況、インパクトファクターの高い学術雑誌に論文掲載しなければならない状況、研究予算獲得の現状などを克明に伝え、構造的な問題を明らかにしていた。NHKらしい番組で感心した。

(NHK側)

研究不正が起きる背景を見極めたいという問題意識で取材した。研究者たちが置かれた困難な状況、日本の科学振興政策の課題など、構造的な問題がある程度浮き彫りに出来たと思う。大きなテーマなので継続して取材を深めていきたい。

- 12月17日(日)のNHKスペシャル「激変する世界ビジネス “脱炭素革命”の衝撃」は、再生可能エネルギーへの劇的な転換が起きている現状を伝えており、非常によかった。最近では民放を含めて日馬富士の問題ばかりがニュースで取り上げられ、それ以外の報道が少ないことに危機感を覚えていた。この番組は、われわれが気付かないところで起きていることを伝えたことが何よりよかったと思う。
- 12月5日(火)のクローズアップ現代+「追い詰められる留学生～ベトナム人犯罪“急増”の裏側で～」を見た。ベトナムから来日する留学生の数が急増する中、ベトナム人による犯罪件数が急増している実態を明らかにする調査報道で見応えがあった。多額の借金を負わせるベトナムの留学あっせん業者、利益を優先する一部の日本語学校、その間で追い詰められていく留学生の姿がまざまざと伝えられていた。関係者の証言を引き出し、問題の深刻さを明らかにする優れた報道だった。12月9日(土)の「NHKニュース7」でもこの問題を取り上げていたが、人手不足の中で外国人留学生を活用せざるをえない企業側の実情など新たな視点も加わっていてよかった。外国人留学生の過酷な現実には放置できない状況にある。東京オリンピック・パラリンピックを控え、国際社会からはこうした状況は厳しい非難を受ける可能性が高い。外国人留学生だけでなく、外国人技能実習生も含めた外国人受け入れの現状と課題を、総合的に取り上げる番組を検討してもらいたい。一方



で、この報道により、ベトナム人留学生への社会的な偏見が生じないか心配になった。番組でも一定の配慮は感じられたが、こうした報道では特段の配慮が必要だと思う。継続的な報道と配慮で公共放送としての役割を果たしてもらいたい。

- 「平成30年度国内放送番組編集の基本計画(案)」でも言及されたように人口減少の問題は非常に大きな問題だが、その大きな波の中で外国人留学生の問題も考えていかなければならないと思う。大きなテーマを長期的に取り上げていくのはNHKの重要な役割だ。学びに来ているにもかかわらず週28時間も働けてしまう制度の問題や、外国人に対し精神的バリアを持ってしまいがちな国民の傾向など、日本側の課題などにも焦点を当てつつ、構造的な問題として今後も丁寧に追いつけてほしい。
- 12月13日(水)のクローズアップ現代+「夫婦げんかで子どもの脳が危ない!？」は、子どもの脳の発達に夫婦げんかが大きく影響しているという内容で驚かされた。夫婦げんかが子どもに影響することは理解できるのだが、脳が萎縮するのは本当なのか。統計的なデータも示し、暴力を伴うけんかよりもことばによるけんかのほうが萎縮率は6倍も高いと伝えていたが、にわかには信じがたかった。夫婦げんかはしないに越したことはないが、夫婦げんかで子どもの脳が危ないと言い切ってしまうとよいものか気になった。もう少し詳しい説明をしたほうがよかったのではないかな。脳の萎縮は、本当だとすれば大きな問題だと思う。発達障害などの違いも含めて、もっとさまざまな角度から伝えてもらいたい。
- 夫婦げんかが子どもの脳の発達に影響するというのは、大きな問題だと思った。子どもの発達と脳科学を関連させる研究は、今さかんに行われる傾向があるが、この研究はデータの妥当性、信頼性はどうだったのか。親に対する影響も非常に大きい内容だっただけに気になった。

(NHK側)

最新科学の知見を伝えることには常に難しさがあるのだが、論文が学会である程度支持を得ているものかどうかを確認して放送するように努めている。今回の研究は福井大学とハーバード大学によるものだが、私たちも最初に聞いたときはにわかには信じがたかった。番組で取り上げてよいものかどうか、論文として査読を受けているか、学会の中で支持を受けているかなどを確認したうえで放送した。

- 夫婦げんかで子どもの脳が危ないという話と生まれつきの発達障害とは別の話だが、一般の視聴者は専門家ではないため、その区別がつかずに考えやすい方向で捉えてしまう場合があるから配慮が必要だ。今回のような内容を伝えると「あの母親の子どもだから、父親がああいうことをやっているから、こんな子になった」と安易に結びつけて考えてしまう懸念がある。こうした問題を伝える際は、そのことも十分注意してもらいたい。
- 11月22日(水)のハートネットTV「食べ物にされる“福祉”～障害者の大量解雇問題を追う～」を見た。今この問題を取り上げたこと、そして一面的な伝え方にならないように多方面への取材を重ねた努力は評価したい。だが、多角的であろうとすることとわかりやすさは両立が難しいとも感じた。番組では、行政からの給付費を目当てに悪質な経営をする福祉事業者の存在だけではなく、使途に制限がある給付費を障害者の賃金にあてざるを得ない事業者や、支給に関する規制を強化した行政の実情なども伝えられた。「食べ物にされる」実態だけではなくさまざまな事情や価値観が混在していて、問題は非常に複雑だと思う。そうした中で問題の本質が視聴者にわかりやすく伝わらないと、「障害者の大量解雇はかわいそう」というわかりやすい印象だけが残る情緒的な報道に陥ってしまう危険性があると感じた。多角的な取材を一つのまとまった番組としてどのように伝えるのか。NHKはこれまでも本質を捉えたよい番組が数多くあった。多角的でありながら本質を外さずに伝えるのは難しいことだと思うが、常に心がけてもらいたい。
- 12月10日(日)のバリバラ「LGBT温泉旅」は、レズビアン・ゲイ・トランスジェンダーの方たちが温泉で男湯と女湯のどちらに入るのかというテーマで、刺激的な内容だった。番組では実験的に、温泉の接客係が見た目で男湯と女湯に分ける、戸籍上の性別で分ける、好きな異性の性別が同じ人で分ける、といったさまざまな分け方で入っていたが、その様子を見ながら、今までの常識は現実に対応しきれていないこと、今でも既にあちこちの温泉で起きている問題であろうことに自然と気付かされた。映像が私には衝撃的だったのだが、一緒に番組を見ていた子どもは平然としており、いつの間にかそういう目で見てしまっている自分に気付かされた。そのことへの反省と同時に、多様な人がいることが当たり前で育つことの可能性も感じ、さまざまなことに気付かされる良質な番組だと思った。
- 11月26日(日)のBS1スペシャル「原発事故7年目 甲状腺検査はいま」は、福島県の小児甲状腺がんというデリケートな問題を取り上げた、勇気ある内容だったと思う。甲状腺がんやがんの疑いがあると診断された子どもが194人もいる深刻な実態の一方で、「過剰診断をしている」「死ぬ危険性もないものをわざわざ見つ

けて不要な手術が行われる恐れがあるのではないか」という声があがっていること、双方をうまくバランスを取りながら伝えていたと思う。ただ、本当に検査をしなくてもよいのか、もう少し明確にできたのではないか。チェルノブイリ原発事故におけるウクライナやベラルーシなどの実態を克明に取材し、国内の事例も積み重ねながら、検査をしなくなった場合に、福島の子どもが甲状腺がんで死ぬことは本当ではないのか、というところまで突っ込めば、検査をやめてもよいのかどうか、見えてくると思う。双方の意見を伝えてバランスを取るとはとても大事なことだが、もう一步踏み込んでもらいたかった。

- 12月10日(日)の世界はT o k y oをめざす「五輪の厨房(ちゅうぼう) 2020おもてなしの舞台裏」を見た。東京大会で選手村の厨房に立つことを夢見る料理人や、選手たちに自慢の食材を食べてほしいと願う農家たちなどが登場し、“おもてなし”の中心となるであろう「食」の舞台裏を追う内容だったが、その中で、食の品質や安全への意識と取り組みについて、調達コードの国際基準や他国の事例を紹介しながら今の日本の水準を伝えていたことがとても興味深かった。登場した農家の方々は、日本にこうした考え方が広まっていない中で意識をそろえていくことの困難さと、2020年以降もグローバルな問題として継続的に取り組むべき課題であることを訴えていた。その意識を日本全体のものとしていくことが、国際社会の一員として重要なことだと感じた。番組の本筋ではない中でこの課題に触れたことは、認識の入り口としてよかったと思う。今後は報道番組なども含めて、継続的に取り上げてもらいたい。

NHK編成局  
番組審議会事務局